



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	心理臨床場面におけるセラピストの非言語行動の定量化— カウンセリング実習における面接評価との関連 Quantifying of Therapist's Nonverbal Behavior in Psychotherapy: The Relationship between Therapist's Nonverbal Behavior and Session Evaluation in Counseling Training
Author(s)	中谷 恵子 (NAKATANI Keiko) 待田 昌二 (MACHIDA Shoji) 東 豊 (HIGASHI Yutaka)
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇 Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University , No.1 : 45-60
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# 心理臨床場面におけるセラピストの非言語行動の定量化 ——カウンセリング実習における面接評価との関連

中谷 恵子<sup>1)</sup>・待田 昌二・東 豊

神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科

Author's E-mail Address: machida@shoin.ac.jp

---

## Quantifying of Therapist's Nonverbal Behavior in Psychotherapy: The Relationship between Therapist's Nonverbal Behavior and Session Evaluation in Counseling Training

NAKATANI Keiko, MACHIDA Shoji, HIGASHI Yutaka

Graduate School of Letters, Kobe Shoin Women's University

### Abstract

本研究は、カウンセリング実習における面接場面を対象とし、セラピスト、クライエント、臨床家によって良いと評価される面接におけるセラピストの非言語行動の定量化及び評価との関連を明らかにすることを目的とした。その結果、本研究において観察対象とした12種類の非言語行動のうち、クライエントの話を聴いているときのうなずきとまばたきについては、セラピストの個人差が顕著であること、セラピスト及びクライエントの評価との関連では、手振りが多いほど面接が活発で興奮したものであったと感じられることなどが示された。

キーワード：非言語コミュニケーション、面接評価尺度、うなずき、まばたき

Key Words: non-verbal communication, Session Evaluation Questionnaire, sigsaji, nod, blink

対人コミュニケーションは、2人以上の人間が自己の意思・知識・意見・態度など、意味のあるメッセージを相互に伝え合う過程と定義される（大里，2005）。我々が社会生活を営む際には、他者とのコミュニケーションが重要であり、特に対面対話場面においては、音声言語を用いた情報伝達だけではなく、表情や視線、姿勢、身体動作といった様々な情報を合わせて用いることにより、より円滑なコミュニケーションを行っている（高木，2006）。

1) 神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科修士課程 2009 年度修了

*Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University*, No. 1 (March 2012), 45–60.

神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇 No. 1 (2012 年 3 月), 45–60.

様々なコミュニケーションのうち、シンボルとしての言語を用いる言語コミュニケーションは、文章や言葉の意味が問題とされるもので、意図的で意識される程度が高い。それに対して、非言語コミュニケーションは、視線や音声の形式的側面（発言と沈黙のタイミング、抑揚、大きさなど近言語的特徴）、顔面表情、身振り・姿勢や動作、身体接触、対人距離や空間行動（座席の位置、なわばり）、外見（容貌、スタイルなど）、服飾や化粧、さらには匂いやインテリアなど多くのチャンネル（伝達手段）を含み、多岐にわたる伝達特性を持っている。これらのチャンネルは意識される程度が低く、好悪などの感情の伝達に適している。また、言葉の不足を補う場合にみられるように、言語コミュニケーションの代替機能を果たすこともある（大坊, 1995）。

### 心理臨床場面における非言語コミュニケーション

2者間の会話が重要な機能的意味を持つ面接場面における非言語コミュニケーションの研究は数多く行われている。例えば雇用面接場面では、求職者の非言語行動が面接者の下す評価を左右するほどの影響力を持つということが明らかになっており（パターンソン, 1983）、医療場面や心理臨床場面においても、非言語コミュニケーションの重要性が認識されてきている（谷山・甲斐・高橋, 2005；吉川, 1999）。

心理臨床場面における面接技法を解説した書籍は数多くあるが、非言語コミュニケーションに焦点を当てているものは少ないようである。菅野（1987）は、クライアント側の非言語行動に焦点を当て、心理臨床場面において非言語コミュニケーションが意義を持つのは、障害者、乳幼児など言語能力が欠如ないし未発達のため、言語コミュニケーションが不可能もしくは著しく不十分な場合と、言語能力は有していても、不安や緊張、心理的防衛など何らかの精神的理由によって、言葉には意志や感情、欲求とは別なものが表出されてしまう場合であるとしている。特に後者の場合、言葉として意識されなかった無意識の欲求や願望を非言語行動が表出することがあり、心理臨床場面ではより重要視されているとしている。

セラピスト側の非言語行動に焦点を当てているものとして、ジョイニング（参加すること）という概念がある。ジョイニングについてミニューチン（1974）は、「セラピストが家族員や家族システムと直接に関係を持つととする行為を強調する場合に用いられる」と述べ、ある家族システムに参加するために、セラピストは家族の組織とスタイルを受け容れ、それらに溶け込まなければならないとしている。ジョイニングを促進する技法の1つに、セラピストが家族の言語、非言語行動を取り入れるマイムという技法があり、セラピストは、いわばパントマイムのように家族の真似をする。意識的、または無意識的に真似をする対象は、言葉遣い、しぐさ、感情表現、比喩的表現など様々なものである（遊佐, 1984）。

また、吉良（1995）は、「心理臨床が人間同士の関わりを基盤とした営みである以上、言葉以前の治療者の雰囲気、表情、身ぶり、口ぶり、服装など、ノンバーバルな要素がクライアントに大きな影響を与えている」と述べ、心理臨床場面における非言語的な要素の影響の大きさを指摘している。そして、心理臨床場面におけるセラピスト側の表情の表出について、「できれば地の要素に留まり、図を描くのは言葉の機能に任せておくべきである」と述べ、表情

の表出は控えめが良いとしている。

これまでに行われた心理臨床場面における非言語コミュニケーションの研究について、那須田（1999）は、日本人を対象に日本人によって行われた研究は、実証的・量的な研究よりも臨床経験に基づく記述的・質的な研究が多く、実証的研究の多くは欧米人によって欧米人を対象に行われているということから、日本人を対象とした実証的研究を行う必要性があると指摘している。また、欧米の研究では、セラピストがクライアントとの関係が良好ではないと感じるとき、前傾姿勢や微笑が多くなることが示されており、前傾姿勢や微笑の他にも、うなずき、まっすぐに見ること、体をクライアントに向けることなどがセラピストの行動として好ましいとされている（Tickle-Degnen & Rosenthal, 1992）。

日本人を対象に日本人によって行われた実証的・量的な研究として、佐治・鶴飼（1980）がある。佐治・鶴飼は、ボランティアとして募集されたセラピスト、クライアント 15 ペアを対象とし、それぞれの動きを実験的な設定で数量的に取り出すこと、高水準のカウンセリング的なコミュニケーションを行った高得点群と低水準のカウンセリング的なコミュニケーションを行った低得点群の比較検討を行うことを目的とした実験的検討を行った。

その結果、計 5 回の面接では、高得点群のセラピストの動きは、面接ごとに異なる頻度の推移を示しながらも連続性がみられ、高得点群のクライアントの動きは、初回面接と他の回の推移が異なるパターンを示していた。低得点群のセラピストとペアでは、セラピストとクライアントの動きの頻度の単純加算が極端に低い場合があった。また、高得点群、低得点群各 1 事例ずつの検討から、動きの頻度数が、当事者のカウンセリングへの取り組み方の違い及び内的な感情の状態によって左右されることが確認された。

## 本研究の目的

心理臨床場面における日本人を対象とした日本人による実証的・定量的な研究は若干行われているが、セラピストの非言語行動の違いによるセラピストに対する評価についての研究が多いようである。また、面接に対する評価の違いによる非言語行動の定量的な研究である佐治・鶴飼（1980）の問題点として、観察対象とした行動が動きという曖昧なものであること、観察対象とした時間が面接全体ではなく、面接の一部であることが挙げられる。

そこで本研究では、心理臨床場面における非言語行動、特にセラピスト側の笑顔、視線、姿勢、腕組み、手振り、自己接触、うなずき、まばたきに焦点を当て、セラピスト、クライアント及び臨床家によって良いと評価される面接における非言語行動を定量的に明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 対象

本研究では、臨床心理学系大学院修士課程 1 年の前期に行われるカウンセリング実習における面接場面を対象とした。この実習は、大学院生が実習内容に同意した大学生を対象に大学内の心理相談室において面接を行うというものであるが、心理的に健康な青年を対象とし、

5回に限定したカウンセリングを実施するという点で実際の心理臨床面接とは異なっている。

本研究の対象者は、カウンセリング実習において面接を担当し、非言語行動の観察対象となった臨床心理学を学ぶ大学院生（以下 Th とする）8名、カウンセリング実習においてクライアント役となり、面接場面の評価を行った大学生（以下 Cl とする）8名、面接場面の一部分の視聴と評価を行った臨床家（以下臨床家とする）4名であった。Th 及び Cl はすべて女性であった。また、臨床家はいずれも臨床心理士の資格を有するとともに心理臨床経験が15年以上であった。

### 面接評価尺度

本研究における面接の評価には、面接評価尺度（Session Evaluation Questionnaire：以下 SEQ とする）の日本語版を用いた。SEQ はもともと Stiles (1980) によって作成された尺度である。日本ではカウンセリングや心理療法における面接評価に関する研究がほとんど行われておらず、日本語の面接評価尺度がほとんどないということから、葛西 (2006) によって日本語版の作成と信頼性の検討が行われた。日本語版 SEQ は、カウンセリング面接の評価を測定するもの9対（以下面接の評価尺度とする）と、面接終了後の情緒の状態を測定するもの9対（以下面接後情緒状態尺度とする）で構成されている。

面接の評価尺度は、「深さ (depth)」と「なめらかさ (smoothness)」の2つの次元に分けられており、面接後情緒状態尺度は、「肯定感 (positivity)」と「興奮感 (arousal)」の2つの次元に分けられている。「深さ」は、面接に対する価値や強さの程度を測るものであり、「価値のある—価値のない」などの5項目で構成されている。「なめらかさ」は、面接後の快適さ、安全性などの程度を測るものであり、「リラックスした—緊張した」などの4項目で構成されている。「肯定感」は、面接後の自信、幸福感、怒りや恐怖のなさの程度を測るものであり、「うれしい—悲しい」などの7項目で構成されている。「興奮感」は、気分の活動性や活発性の程度を測るものであり、「敏速な—ゆっくりした」、「興奮した—落ち着いた」の2項目から構成されている (葛西, 2006)。

本研究では、面接の評価尺度、面接後情緒状態尺度の2つの尺度において、9つの項目を得点の高い方の形容詞を左側にしたときのあいいうえお順に並べ替え、得点の高い方を左側、右側、左側、右側、左側、右側、左側、右側、左側とした上で各形容詞対を両極として、「とても」、「かなり」、「やや」、「どちらでもない」、「やや」、「かなり」、「とても」の7段階評定とした。

### 手続き

Th、Cl 及び臨床家には、事前に研究の目的とデータの記録・処理方法を明記した文書を配付し、研究参加への同意について確認した。なお、すべての Th、Cl、臨床家から同意を得られた。

カウンセリング実習における面接は、2009年6—7月に大学内の心理相談室の面接室において Th と Cl の各ペア5回行われ、1回の面接時間は約50分間とされていた。ビデオカメラ

の存在が多少なりとも面接に影響を与える可能性があるため、Th と Cl の関係が安定する第 4 回面接と第 5 回面接を本研究の観察対象とした。

面接の撮影には、デジタルビデオカメラ (Victor GZ-MG880 または SONY DCR-IP220K) を用いた。ビデオカメラは、Th、Cl の入室前に面接室に設置し、Th の斜め前方約 2m の位置に三脚で設置した。映像は、Th の上半身が納まるように撮影され、音声も記録された。撮影は、Th、Cl の入室前に開始し、Th、Cl の退室後に終了した。

面接終了後、Th には別室で SEQ に回答し、回答が終わり次第筆者まで持参することを求め、Cl には、面接終了後のできるだけ早い時期 (当日中もしくは次の日まで) に SEQ に回答し、回答が終わり次第筆者まで郵送することを求めた。

また、臨床家には、8 名の Th すべてが 5 回の面接を終了した後、第 4 回面接と第 5 回面接の面接場面が録画された映像の一部分 (各面接の開始から 15 分まで) の視聴と、視聴後の SEQ への回答を求めた。臨床家は、16 回 (Th8 名×2 回) の面接すべてではなく、8 名の Th すべての第 4 回面接あるいは第 5 回面接のどちらかの面接 (1 名の臨床家につき計 8 回) を視聴し、1 回の面接を 2 名の臨床家が視聴した。臨床家への面接の振り分けは、筆者が行った。なお、臨床家は、第 1 回から第 3 回の面接の視聴は行っていない。

### 非言語行動の記録

本研究では、Th の笑顔 (微笑、開口)、視線、姿勢 (前傾、後傾、ほおづえ)、腕組み、手振り、自己接触、うなずき (相手、相手以外)、まばたきを観察対象とし、行動項目と定義 (まばたきを除く) を Table 1 に示した。

観察対象とする非言語行動の選択は、これまでに行われた会話場面、医療面接場面及び心理臨床場面の研究において観察対象とされていた行動を参考に行った。特に、医療面接場面や心理臨床場面における研究では、微笑、視線、姿勢、うなずき、まばたき (長岡・小森, 2009; 中村・松尾・畑山, 1994; 谷山他, 2005; 山谷, 2008) が観察対象とされていた。

また、各行動の定義は、プウル (1987)、エクマン・フリーセン (1975)、木村・磯・桜木・大坊 (2005)、木村・余語・大坊 (2004)、戸田・高村 (2003) を参考に行った。

本研究では、面接時間を Th が面接の記録用に行っている録音の開始から終了までとし、面接時間すべてを観察対象とした。面接時間の平均は、50 分 9 秒 (最短 45 分 37 秒、最長 54 分 32 秒) であった。

Th の非言語行動の記録は、各面接を 5 分ごとのセクションに分け、Table 1 の定義に基づいて、デジタル録画された面接場面を再生しながらパーソナルコンピュータ上のイベントレコーダーである sigsaji (荒川, 2008; 荒川・鈴木, 2004) を用いて筆者が単独で行った。各非言語行動のうち、笑顔、視線、姿勢 (前傾、後傾)、手振り、自己接触、うなずき、まばたきについては、頻度 (回数) と累積時間を記録し、腕組み、姿勢 (ほおづえ) については、頻度と累積時間は記録せず、1 セクション中にそれぞれの行動が生じたかどうかを記録した。

Table 1 本研究における各非言語行動の定義

行動項目	定義
笑顔	微笑 唇の両端が後ろへ引かれ、多少上がり、頬が持ち上げられているもの。
	開口 微笑の状態に開口（歯の開き）があるもの。
視線	顔の向きに関係なく、相手の顔を見たと判断されるもの。瞳の位置を判断の目安とする。
姿勢	前傾 体を前に傾ける。胴が主軸の前方に傾けられているもの。
	後傾 体を後ろに傾ける。胴が主軸の後方に傾けられているもの。
	ほおづえ ひじをついて手のひらで頬やあごを支えているもの。
腕組み	一方の手、もしくは両手が上腕部か下腕部によって隠れて見えなくなっているもの。 手が隠れていないものであっても、両手が腕に接触しているものも含む。
手振り	手を用いて何かを指したり、形を表したり、動きを表したり、リズムをとったりする動作。
自己接触	手による頭や顔、腕など自身の体に対する接触。着衣も含めるが、腕組み、ほおづえは含まない。 上腕部より上の部分に限定する。
うなずき	相手 相槌と同じ。相手の話を聴いているときの頭部の上下運動、発話を伴う場面も含む。
	相手以外 セラピストが話をしているときなど、相手の話を聴いているとき以外の頭部の上下運動、 発話を伴う場面も含む。

## 結果

### 各非言語行動の生起頻度

非言語行動の生起頻度の分布については、第10セクションまでを分析対象としたが、1名のThの第10セクションが37秒と短時間であったため、対象から除外し、分析対象は159セクションとした。第11セクション（面接開始後50分以降）については、5分に満たない場合があったため、セクションごとの分析においては除外した。また、1名のThの第5回面接の手振りについては、撮影角度が悪く、十分に観察できなかったため、以降の分析からは除外した。

笑顔（微笑）の生起頻度は、分析対象とした159セクション中92セクション（58%）において20%から40%の間に分布していた。一方、笑顔（開口）の生起頻度は、88%のセクションで2%以下であり、Thは基本的には開口のある笑顔をあまり示していなかった。

視線の生起頻度は、93%のセクションで80%以上であり、Thは基本的にはCIを見ていることがわかった。CIから視線を外すのは、ほとんどの場合メモを取るときであった。

姿勢（前傾）の生起頻度は、70%のセクションで70%以上、姿勢（後傾）の生起頻度は、79%のセクションで5%以下であり、Thは基本的には後傾姿勢をあまり示していなかったが、どちらも個人差が大きかった。

手振りの生起頻度は、76%のセクション（149セクション中113セクション）で10%以下、自己接触の生起頻度は、86%のセクションで10%以下であったが、どちらも個人差がみられた。

うなずき（相手）の生起頻度は、1分間あたり10回以下から60回以上、うなずき（相手以外）

の生起頻度は、1分間あたり5回以下から30回以上、まばたきの生起頻度は、1分間あたり20回以下から100回以上と個人差が大きかった。

以上10種類の非言語行動の他に、姿勢（ほおづえ）と腕組みについては、第1セッションから第9セッションの各セッション中にそれぞれの行動が生じたかどうかを記録した。

姿勢（ほおづえ）は、第4回面接、第5回面接ともに2名のThのみにみられ、腕組みは、第4回面接、第5回面接ともに一部のThのみにみられた。

### 非言語行動の一貫性

10種類の非言語行動それぞれについて、第1セッション（面接開始から5分まで）から第9セッション（面接開始後40分から45分まで）の各セッションにおいて行動生起頻度のTh間の順位が変動するかどうかを調べるため、Kendallの一致係数を算出し、Table 2に示した。

Table 2 セクションごとの行動頻度のTh間の順位のKendallの一致係数

行動項目	面接番号	<i>W</i>
笑顔（微笑）	4	.39 **
	5	.60 ***
笑顔（開口）	4	.60 ***
	5	.63 ***
視線	4	.59 ***
	5	.66 ***
姿勢（前傾）	4	.80 ***
	5	.68 ***
姿勢（後傾）	4	.67 ***
	5	.41 **
手振り	4	.71 ***
	5	.75 ***
自己接触	4	.74 ***
	5	.67 ***
うなずき（相手）	4	.93 ***
	5	.87 ***
うなずき（相手以外）	4	.46 ***
	5	.67 ***
まばたき	4	.98 ***
	5	.89 ***

\*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

その結果、10種類すべての非言語行動において、第4回面接、第5回面接ともにTh間の順位は大きく変動しておらず、ある程度一致していた。姿勢（前傾）、手振り、自己接触、うなずき（相手）、まばたきの一致係数は、第4回面接、第5回面接ともに0.60以上であり、一致度が高かった。特にうなずき（相手）とまばたきの一致係数は、第4回面接、第5回面接ともに0.80以上と非常に高かった。

一致係数の最も低かった第4回面接での笑顔（微笑）と一致係数の最も高かった第4回面接でのまばたきについて、1セッション（5分）あたりの生起頻度の推移をThごとに折れ線でFigure 1、Figure 2にそれぞれ示した。まばたきでは折れ線の交わりが少なく、Thごとに生起頻度が一定していることがわかる。

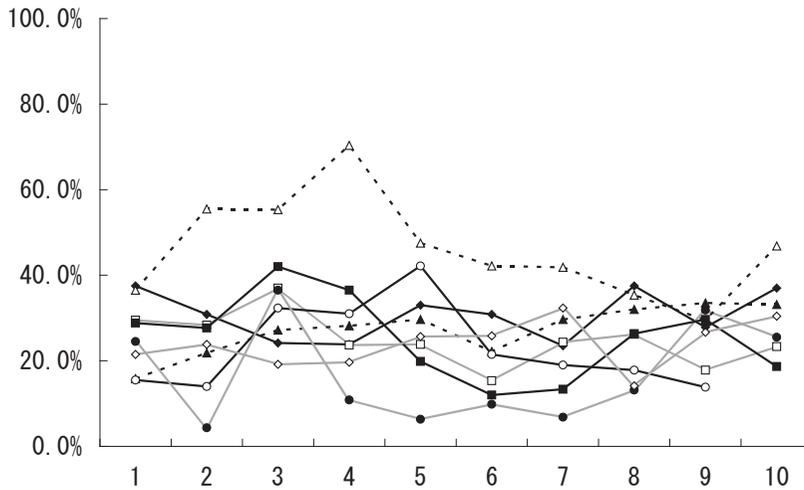


Figure 1 セクションごとの笑顔（微笑）（第4回面接）の生起頻度

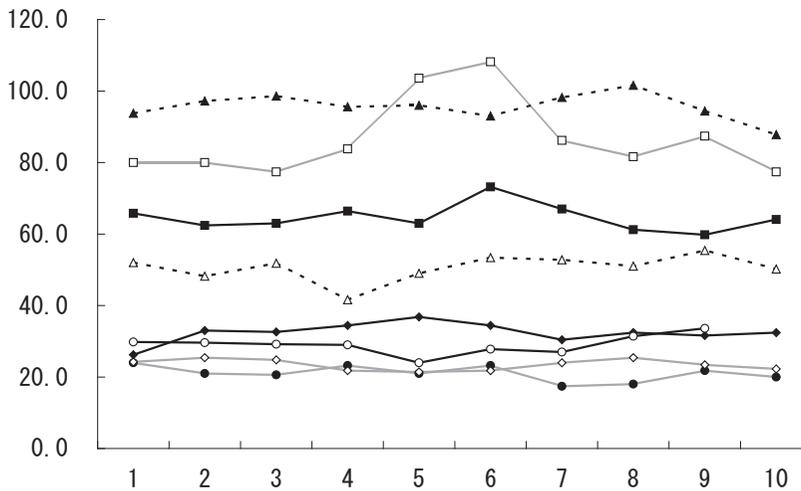


Figure 2 セクションごとのまばたき（第4回面接）の生起頻度

次に、10種類の非言語行動について、2回の面接の関連について検討するため、1回の面接あたりの非言語行動の頻度あるいは回数のTh間の順位を求め、第4回面接と第5回面接の

Spearman の順位相関係数を算出した (Table 3)。

Table 3 第4回面接と第5回面接における行動頻度の Th 間の順位の相関

行動項目	$r_s$
笑顔 (微笑)	.64
笑顔 (開口)	.37
視線	.81 *
姿勢 (前傾)	.24
姿勢 (後傾)	.23
手振り	.86 *
自己接触	.48
うなずき (相手)	.95 **
うなずき (相手以外)	.86 **
まばたき	.98 **

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

その結果、視線、手振り、うなずき (相手)、うなずき (相手以外)、まばたきに有意な正の相関が認められた。すなわち、第4回面接において視線、手振り、うなずき (相手、相手以外)、まばたきが多いほど、第5回面接においても視線、手振り、うなずき (相手、相手以外)、まばたきが多いという関連性が明らかになった。特に、うなずき (相手) とまばたきについては、相関係数が0.95以上であり、面接間で順位がほぼ一致していた。

Table 2、Table 3 より、一致度の高さで2回の面接の関連性が明らかになったことから、うなずき (相手) とまばたきについては、Th による個人差が顕著であるということが明らかになった。

#### 非言語行動と Th による評価の関連

次に、10種類の非言語行動と Th による評価の関連について検討するため、1回の面接あたりの非言語行動の累積時間の割合 (または1分間あたりの回数) と Th による評価得点 (4つの下位尺度得点と合計得点) の Spearman の順位相関係数を算出した (Table 4)。なお、評価は面接ごとに行い、同一 Th の第4回面接と第5回面接をそれぞれ別のデータとして扱ったため、 $N=16$  である。

Table 4 非言語行動と Th による評価の順位相関 ( $r_s$ )

	深さ	なめらかさ	面接の評価尺度 合計	肯定感	興奮感	面接後情緒状態 尺度合計
笑顔 (微笑)	-.32	.11	-.15	-.01	.03	.09
笑顔 (開口)	-.40	.05	-.41	-.35	-.05	-.35
視線	-.04	-.24	.02	.25	-.02	.19
姿勢 (前傾)	.16	.01	.19	-.11	-.28	-.13
姿勢 (後傾)	-.10	-.12	-.13	.16	.37	.17
手振り	-.18	-.46	-.35	.04	.54 *	.25
自己接触	.09	.32	.10	-.15	.02	-.18
うなずき (相手)	.48	.11	.51 *	.18	-.19	.04
うなずき (相手以外)	-.32	-.09	-.35	-.81 **	-.73 **	-.90 **
まばたき	-.12	.01	.04	.35	.28	.38

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$ 

その結果、手振りと「興奮感」、うなずき (相手) と面接の評価尺度合計に有意な正の相関が認められ、うなずき (相手以外) と「肯定感」、「興奮感」、面接後情緒状態尺度合計に有意な負の相関が認められた。すなわち、手振りが多いほど、面接が活発で興奮したものであったと感じられ、CI の話を聴いているときのうなずきが多いほど、面接が良いものであったと感じられるという可能性、CI の話を聴いているとき以外のうなずきが少ないほど、面接が肯定的、活発で興奮したものであったと感じられ、面接終了後の情緒状態が良いと感じられるという可能性が明らかになった。

### 非言語行動と CI による評価の関連

Th による評価の場合と同様に、10 種類の非言語行動と CI による評価の関連について検討するため、1 回の面接あたりの非言語行動の累積時間の割合 (または 1 分間あたりの回数) と CI による評価得点 (4 つの下位尺度得点と合計得点) の Spearman の順位相関係数を算出した (Table 5)。

Table 5 非言語行動と CI による評価の順位相関 ( $r_s$ )

	深さ	なめらかさ	面接の評価尺度 合計	肯定感	興奮感	面接後情緒状態 尺度合計
笑顔 (微笑)	-.51 *	-.30	-.46	-.20	-.23	-.24
笑顔 (開口)	.00	-.18	-.11	-.42	-.21	-.45
視線	-.11	.20	.13	.07	-.56 *	.01
姿勢 (前傾)	-.26	.14	-.08	-.32	-.44	-.38
姿勢 (後傾)	.19	-.09	.08	.26	.21	.29
手振り	.04	-.38	-.15	.11	.80 **	.23
自己接触	.34	.09	.23	-.04	-.10	-.13
うなずき (相手)	-.24	-.32	-.37	-.28	-.19	-.25
うなずき (相手以外)	.32	-.38	-.16	-.08	-.08	.02
まばたき	-.31	-.17	-.16	-.06	-.38	-.11

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

その結果、手振りと「興奮感」に有意な正の相関が認められ、笑顔（微笑）と「深さ」、視線と「興奮感」に有意な負の相関が認められた。すなわち、手振りが多いほど、面接が活発で興奮したものであったと感じられるという可能性、笑顔（微笑）が少ないほど、面接が深いものであったと感じられ、CIに対する視線が少ないほど、面接が活発で興奮したものであったと感じられるという可能性が明らかになった。

### 非言語行動と臨床家による評価の関連

次に、10種類の非言語行動と4名の臨床家による評価の関連について検討するため、面接開始から15分間の非言語行動の累積時間の割合（または1分間あたりの回数）と臨床家による評価得点（2つの下位尺度得点と合計得点）のSpearmanの順位相関係数を算出し、相関係数の分布をFigure 3—5に示した。なお、いずれも $r_s \geq .715$ 、 $r_s \leq -.715$ のときに相関係数は有意（ $n=8$ ,  $p<.05$ ）であった。

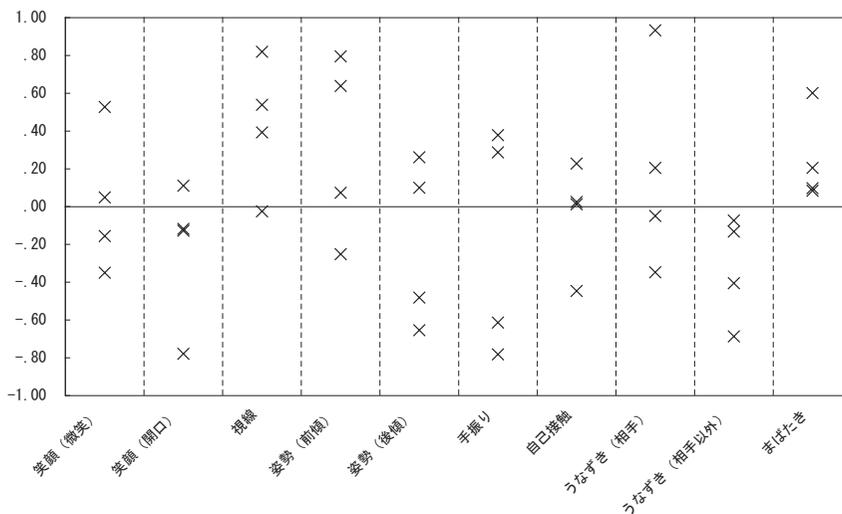


Figure 3 非言語行動と臨床家による評価（深さ）の順位相関 ( $r_s$ )

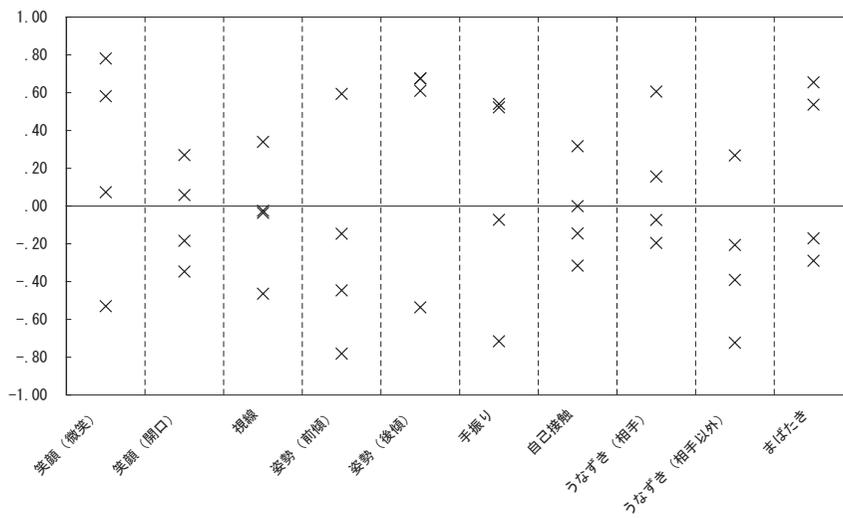


Figure 4 非言語行動と臨床家による評価（なめらかさ）の順位相関（ $r_s$ ）

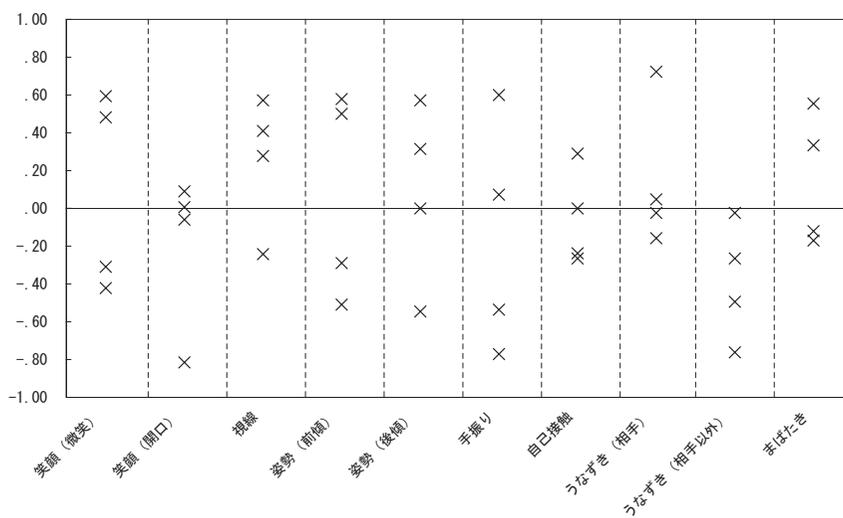


Figure 5 非言語行動と臨床家による評価（面接の評価尺度合計）の順位相関（ $r_s$ ）

その結果、4名の臨床家による評価と行動の相関は、ほとんど一致することはなく、4名の臨床家ともに面接評価との間に有意な相関が認められた行動はなかった。しかし、臨床家によって有意な相関が認められない部分があったが、うなずき（相手以外）については、4名の臨床家に共通して、面接の評価尺度合計との間に負の相関が認められた。

また、笑顔（微笑）の多い面接を良いと評価する臨床家、CIに対する視線の多い面接を良いと評価する臨床家など、臨床家によって評価の傾向に違いがみられた。

### 姿勢（ほおづえ）、腕組みと Th、CI による評価

次に、本研究において 10 種類の非言語行動の他に観察対象とした姿勢（ほおづえ）と腕組みについての検討を行った。

姿勢（ほおづえ）と腕組みについては、各面接においてそれぞれの行動が生じたセッション数を算出し、姿勢（ほおづえ）及び腕組みが生じた Th と生じなかった Th の面接における Th 及び CI による評価に差があるかどうかについて検討するため、Mann-Whitney の *U* 検定を行った。

その結果、Th による評価では、姿勢（ほおづえ）、腕組みのどちらにも有意な差は認められなかった。

CI による評価では、姿勢（ほおづえ）については、「なめらかさ」( $U=6.00, p<.05$ )、「興奮感」( $U=6.00, p<.05$ ) に有意な差が認められた。すなわち、ほおづえが生じた Th の面接の方が、面接がなめらかなものと感じられ、ほおづえが生じなかった Th の面接の方が、面接が活発で興奮したものであったと感じられるということが明らかになった。しかし、腕組みについては、有意な差は認められなかった。

### 考察

Th 間の順位の一貫性が特に高かったうなずき（相手）とまばたきについては、面接内容などの Th の個人差以外のものに影響されにくい行動であると考えられる。まばたきについては、1 分間あたりの瞬目率の比較において平均的な個人差が認められたという長岡・小森（2009）の結果と一致している。また、Th 間の順位の一貫性が特に低かった笑顔（微笑）と姿勢（後傾）については、CI によって語られた内容がやや深刻なものであった面接において頻度が減少する Th がみられたことから、面接内容などの Th の個人差以外のものに影響されやすい行動であると考えられる。

本研究における Th による評価との関連では、同じうなずきであっても、CI の話を聴いているときのうなずきと、Th が話しているときなどの CI の話を聴いているとき以外のうなずきで評価が異なることが示された。医療場面における谷山他（2005）の研究では、相手の話を聴いているときのうなずきであるのか、それ以外のうなずきであるのかの区別は行われていない。これは、評価との関連を検討する場合における非言語行動が生起する文脈を分類する必要性を示唆している。

本研究における CI による評価との関連では、笑顔（微笑）が少ないほど、面接が深いものであったと感じられた。しかし、医療面接場面における研究では、医師の微笑は医師に対する印象形成に良い影響を与えるという結果（谷山他，2005）、欧米の心理臨床場面における研究では、Th の行動として、微笑は好ましい行動であるという結果（Tickle-Degnen & Rosenthal, 1992）が示されており、笑顔の頻度だけではなく、笑顔の意味にも注目する必要があると考えられる。

また、有意ではなかったが、姿勢（前傾）については、面接の評価尺度の「なめらかさ」以外に負の相関が認められ、姿勢（後傾）については、面接の評価尺度の「なめらかさ」の

みに負の相関が認められた。しかし、中村他（1994）、谷山他（2005）、山谷（2008）の研究では、前傾姿勢は、後傾姿勢よりも印象形成に良い影響を与えるという結果が示されている。このことから、本研究におけるCIによる評価では、Thの後傾姿勢が、CIを受け入れる姿勢であると評価された可能性がある。

非言語行動とTh、CIによる評価を比較したとき、Th、CIともに手振りと「興奮感」との間に有意な正の相関が認められた。うなずき（相手）については、Thによる評価との間には、「興奮感」以外で正の相関が認められたが、CIによる評価との間には、「深さ」以外で負の相関が認められ、ThとCIで大きく異なっていた。まばたきについては、Thによる評価との間には、「深さ」以外で正の相関が認められたが、CIによる評価との間には、すべての下位尺度得点において負の相関が認められ、ThとCIで大きく異なっていた。

うなずき（相手）、まばたきと評価の関連においてThとCIで大きく異なっていたことは、相手に対するうなずきやまばたきには、意識的に行われるものと無意識的に行われるものがあり、Th本人には操作が可能かもしれないが、CIにはどちらも同じものとして伝達される可能性があるためと考えられる。

本研究において臨床家の評価に大きな個人差がみられたことから、それぞれの臨床家の心理臨床面接の技法の違いなどが評価に反映していた可能性が考えられる。

10種類の非言語行動の他に観察対象とした姿勢（ほおづえ）及び腕組みとTh、CIによる評価の結果及びThとCIのSEQの得点から、面接中にほおづえが生じたThの面接においては、Thが比較的にリラックスした面接を進めていたということが考えられる。しかし、ほおづえについては、特定のThのみに生じたことから、個人の癖の可能性も考えられ、心理臨床面接の場面において特徴的に生じるものではない可能性がある。

本研究において観察対象とした10種類の非言語行動のうち、うなずき（相手）、まばたきについては、Thの個人差が顕著であるということが示されたことから、Thの特徴を示す指標として用いることができると考えられる。

また、うなずき（相手以外）については、有意ではない部分があったが、Th、CI、臨床家に共通して負の相関が認められた。これは明確な結果とは言えないが、CIの話を聴いているとき以外のうなずきが少ない方が良い面接である傾向があると考えられる。

以上のように、非言語行動とTh、CI、臨床家すべての評価の関連では、一致した結果は得られなかったが、Th、CI、臨床家それぞれの評価との関連では、いくつかの非言語行動と評価の関連が示された。このことから、本研究の結果が、Thの指導及び訓練の一助となる可能性が考えられる。

本研究では、対象者数や面接回数に限られたものとなってしまった。今後は、Th及びCIの性別に関係なく、より多くの面接の分析を行うことによって、より明確な結果を得ることができるのではないかと考えられる。

## 文献

荒川 歩（2008）. マルチチャネル行動計測ソフトウェア（sigsaji）の開発 対人社会心理

- 学研究, **8**, 111-114.
- 荒川 歩・鈴木直人 (2004). しぐさと感情の関係の探索的研究 感情心理学研究, **10**, 56-64.
- Bull, P. E. (1987). *Posture and gesture*. Oxford: Pergamon Press.  
(市河淳章・高橋 超 (編訳) (2001). 姿勢としぐさの心理学 北大路書房)
- 大坊郁夫 (1995). 魅力と対人関係 安藤清志・大坊郁夫・池田謙一 現代心理学入門4 社会心理学 岩波書店 pp.96-117.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face : A guide to recognizing emotions from facial cues*. Cliffs, NJ: Prentice-Hall.  
(工藤 力 (訳編) (1987). 表情分析入門——表情に隠された意味をさぐる 誠信書房)
- 菅野 純 (1987). 心理臨床におけるノンバーバル・コミュニケーション 春木 豊 (編) 心理臨床のノンバーバル・コミュニケーション 川島書店 pp.45-90.
- 葛西真記子 (2006). セラピスト訓練における治療同盟, 面接評価, 応答意図に関する実証的研究 心理臨床学研究, **24**, 87-98.
- 木村昌紀・磯 友輝子・桜木亜季子・大坊郁夫 (2005). 3者間会話場面に視覚メディアが果たす役割 ——笑顔とうなずきの表出, 及びそれらの行動マッチングに注目して—— 対人社会心理学研究, **5**, 39-47.
- 木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 (2004). 感情エピソードの会話場面における同調傾向の検討 ——擬似同調傾向実験パラダイムによる測定—— 対人社会心理学研究, **4**, 92-99.
- 吉良安之 (1995). 心理臨床における表情 心理臨床, **8**, 232-236.
- Minuchin, S. (1974). *Families & family therapy*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.  
(山根常男 (監訳) (1984). 家族と家族療法 誠信書房)
- 長岡千賀・小森政嗣 (2009). 心理臨床面接におけるカウンセラーの瞬目に関する予備的検討 電子情報通信学会技術研究報告, **109**, 35-39.
- 中村昭之・松尾典義・畑山恵美子 (1994). 心理臨床場面におけるノンバーバル行動 ——カウンセラーの姿勢がクライアントに与える影響について—— 駒沢社会学研究, **26**, 129-140.
- 那須田律子 (1999). 心理臨床場面における非言語コミュニケーション研究の動向 人間文化研究科年報, **15**, 187-198.
- 大里栄子 (2005). 対人コミュニケーションと個人空間 福岡国際大学紀要, No. 13, 21-27.

- Patterson, M. L. (1983). *Nonverbal behavior : A functional perspective*. New York: Springer-Verlag.  
(工藤 力 (監訳) (1995). 非言語コミュニケーションの基礎理論 誠信書房)
- 佐治守夫・鶴養美昭 (1980). カウンセリングに関する実験的検討 (I) ——非言語的な視点から—— 東京大学教育学部紀要, **19**, 1-14.
- Stiles, W. B. (1980). Measurement of the Impact of Psychotherapy Sessions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **48**, 176-185.
- 高木幸子 (2006). コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割 早稲田大学大学院文学研究科紀要, **51**, 25-36.
- 谷山 牧・甲斐一郎・高橋 都 (2005). 医療面接時の医師の非言語行動が与える影響 ——模擬診療場面ビデオの作成と内容妥当性の評価—— 医学教育, **36**, 177-183.
- Tickle-Degnen, L., & Rosenthal, R. (1992). Nonverbal aspects of therapeutic rapport. In R. S. Feldman (Ed.), *Application of nonverbal theories and research*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates. pp.143-164.
- 戸田弘二・高村裕美 (2003). 感情喚起場面におけるノンバーバル・コミュニケーション 北海道教育大学紀要 (教育科学編), **54**, 25-36.
- 山谷奈緒子 (2008). 話し手の姿勢とあいづちが対人認知に及ぼす影響 ——カウンセリング場面を想定した実験的検討—— 人間福祉研究, No. 11, 171-186.
- 吉川真理 (1999). カウンセリングにおける非言語的コミュニケーション 澤田瑞也・吉田圭吾 (編) キーワードで学ぶカウンセリング：面接のツボ 世界思想社 pp.210-221.
- 遊佐安一郎 (1984). 家族療法入門 システムズ・アプローチの理論と実際 星和書店

(受付日：2012. 1. 10)